地域にひらかれた教育課程の創造

―「総合的な学習（探究）の時間」をいかに活性化するか―

狩野浩二

現代社会をめぐる課題は山積し、いつ何時人類の種の持続が脅かされるかわからない時代となった。こうした将来への不安や心配を抱えた社会というものは、つねに自己中心的な発想や競争主義的な利己主義が幅をきかせがちであり、教育研究は、つねにそうした現状を見すえつつ、次の時代のあり方を考察することに取り組まねばならない。本稿は、埼玉県農林部主催による中山間支援ふるさと支援隊の事業を中心に本学学生たちが経験している学修的体験の総体であるカリキュラムに注目し、児童生徒が学ぶ学校教育における教育課程論を構想することが目的である。

１　前提となる地域社会
１）地域の切実な実情
２）日野沢地域とは
３）鳥獣害への対策
２　狩猟採集の世界へ
１）狩猟の世界
２）鹿を射止める
３）野生動物との駆け引き
３　探究と形成の架橋と横断
１）狩猟採集と人類
２）原初的な経験と学習

１　前提となる地域社会

１）地域の切実な実情

シカやイノシシ、ハクビシンなどの野生動物による食害が農村部において課題となっている。従来は、豊かな里山が形成され、野生動物と人間との生活域は、重なることはなかった。それが人口の減少、住民の高齢化、若者の都市部への流出などの複合的な要因により、里山が疲弊し、野生動物の生息域がどんどんと人間の生活域へと拡がってきている。この傾向は全国的なものであり、対策はそれぞれの地域で考えられてはいるものの、有効な対策はなかなかないといってよい。

そもそも野生動物が生活する地域に人類が生息域を広げたのであって、必ずしも野生動物を悪者にすれば良いというものではない。とはいえ、すでに人びとが生活する地域と野生動物との生息域が重なってしまっている現状において、共生という観点からすれば、一定の割合で野生動物を駆除するということが現状では必要なこととなっている。

筆者は埼玉県農林部主催の中山間地域ふるさと支援推進事業において、埼玉県秩父地域の中山間地域と関わりをもつようになった。今年度で秩父地域での活動は、6 年目となる。比企郡小川町における 4 年間[1]を加えれば 10 年間となる。

秩父地域での活動当初は、埼玉県秩父郡皆野町の金沢（かねさわ）地域で活動をしてきた。埼玉県農林部による受託事業が 4 年間の区切りを迎えて、昨年度から地域を拡大（同町日野沢地区）して取り組んできたのである。その中でいくつかの野生動物による農作物の被害に関する話題を耳にしたのである。

本稿では、そうした状況のなかで猟友会による鳥獣害対策に関する実態に光をあてて、今後、学校教育における「総合的な学習の時間」及び、「総合的な探究の時間」に関するカリキュラム開発への知見を得ることを目的としている。

1　狩野「これからの時代における教師教育に関する研究―社会貢献活動による学生の自己成長と地域社会の自立的発展―」、『児童教育実践研究』第 8 巻第 1 号、77-86 頁、2015 年。狩野他「平成 26 年度十文字元気プロジェクト実施報告書―ゆずプロジェクト―」、『児童教育実践研究』第 9 巻、第 1 号、53-61 頁、2016 年。

何より地域にひらかれた教育課程論を構想するためには、現状の把握が必要であり、全国的に課題となっている害獣被害に関する対応を学ぶことは、地域にひらかれた教育課程論を構築する際の原理や原則を考える材料となるのではないかと考えるのである。

２）日野沢地域とは

日野沢（ひのざわ）は、埼玉県秩父郡皆野町に位置する地域である。周囲を山に囲まれ、おおよそ平地といえる場所はほとんどない。筆者が関わる前皆野町長の石木戸道也氏のお宅は、川沿いの静かな場所に佇む。奥深い山から続く渓谷沿いの一本道を挟んで駐車場と自宅の家屋とが両側にあるものの、駐車場は、谷川のギリギリのところにあり、一歩間違えば、谷に落ちてしまうような感じである。辛うじて、一本の丸太が駐車場の西端にあり、それが車止めとなっている。そのすぐ向こう側は、柵はなく谷川へと急斜面が続く。何度か訪ねてきてはいるものの、明るい時間帯だから良いものであり、これがもし、万が一夜間であれば、相当に緊張を強いられる駐車となるだろう。

ご自宅は、その一本道を渡り、東側の急斜面にある。斜面に貼り付くようにして建物が川上から川下へと続く。こうした家がこの地区の特色であり、平らな土地は、ほとんどないといってよい。したがって、この地域で農林水産業を中心とした第一次産業が興り、人びとの生活が継続してきたという風に想像するだけでも、興味深いものがある。日野沢地区は、実に山の中にあるのである。

考えてみれば、日本列島そのものが山地に覆われているのである。たまたま本学が立地する埼玉県南部の新座市は、関東平野にあり、雑木林こそ茂るものの、ほぼ農業で生計を立ててきた地域である。土地が平らであるということは、それだけ、人びとに対してストレスを与えないということである。農業ひとつをとってみても、本学が地域の酒造店や農家と協働して展開したサツマイモプロジェクト[2]なども、夏の暑さを除けば、それほど苦労を強いられるということはなかった。現に平地の多いこの地域では、従来から農業が盛んであり、松平伊豆守信綱公が野火止用水を作るように命じたのもなるほどという感じがする。ちなみに埼玉県新座市を最初に切り拓いたのは、現在の神奈川県鎌倉市周辺の農家であったということであり、新たな土地を求めて、当時の主たる産業であった農業を振興しようとすれば、まずは平らな土地と水を求めるということであろう。

それに比べて、秩父地域は真に山岳地域である[3]。荒川の源流があり、その荒川へと流れ下る小さな川が複数あり、この日野沢地域には、滝が３つも存在するということからすれば、平地はなくとも生命を繋ぐ水が豊富にあり、また、標高が高く（標高 700 メートル以上）、カボチャなどの野菜の栽培には適さないものの、前出の石木戸道也氏は、自宅から自家用車で 10 分ほど離れた山間地に土地を持ち、その農地を活用して蕎麦や小豆、コウリャン、黍などを栽培している。自宅近くの谷川を挟んだ土地には、ウコンやヘチマ、茄子や胡瓜などの自家用野菜が栽培されていた。こうした地域へと人びとが移り住んだのには、さまざまな理由があったと思われる。豊かな水（山の幸）があるということは、それだけで、生活を支える重要な要素たり得るということであろう。

３）鳥獣害への対策

金沢地区や日野沢地区においても、野生動物による農作物の被害が顕著になっている。筆者が関わってきた金沢地域においては、伝統的に栽培されてきたトウモロコシがイノシシなどの野生動物の被害に遭っている。トウモロコシは、在来種の唐黍で、日常的にお目にかかるような、品種改良が施され、甘味や香りが豊かでシンプルな調理が好まれる改良種ではなく、従来からこの地に産す

2　「サツマイモプロジェクト 活動経過」、『児童教育実践研究』十文字学園女子大学人間生活学部児童幼児教育学科児童教育専攻紀要 / 十文字学園女子大学人間生活学部児童幼児教育学科児童教育専攻編、第５巻第１号、101-111 頁、2012 年。高橋京子、廣坂多美子「教員養成課程におけるキャリア教育の可能性:サツマイモプロジェクトの有効性の検証」、『児童教育実践研究』同前、第５巻第１号、95-100 頁、2012 年。

3　埼玉県立川の博物館には、屋外展示として、荒川の源流から河口までをたどる巨大なジオラマがある。また、映像展示として、水源から河口を旅する水滴の物語を見ることも出来る。

るものである。このトウモロコシを干して粉に挽き、さまざまな材料とともに食用にしてきたのである[4]。このことによって、長期保存が可能となるばかりではなく、輸送にも便利になったことであろう。ちなみに石木戸氏によれば日野沢地区にはかつて巨大な水車があり、この水車を「秩父華厳の滝」のすぐ下流域に設置し、この水車の動力を活用して農作物を加工していたということである。現在ではその水車が埼玉県立川の博物館に移設され、往時を偲ばせるものになっている。実際にこの水車は今でも屋外展示として動いており、その動力を活用した粉挽き作業を見ることが出来る。こうしたことから考えても、金沢地域においてトウモロコシの栽培と収穫、その加工が伝統的に行われてきたことが首肯できる。

金沢在住で“たたらの里加工センター”を主宰する高橋冨美子氏によれば、金沢地域には荒川のひとつの支流が流れており、この地が分水嶺となっている。ひとつの流れは、南側の皆野町町内へと流れ下り、そのまま太平洋をめざす河川へと合流し、もう一つは、ここから北側に流れ下り、旧児玉町へと至る。ここもかつては水の豊かな地域だったのである。しかしながら、近年は石材の切り出しの需要で、次第に山肌があらわとなり、山が削り取られていくことと相まって、水資源が減少してきているようである。

金沢地域においては、このトウモロコシなどの農作物に被害が出ているということである。筆者がお世話になっている金沢地区の四方田忠則氏は、町の農業委員長や町議会議員、議長を歴任する一方で、椎茸栽培などで専業農家として生活してきている。近年は、サツマイモの栽培と収穫、それを加工した干し芋づくりを行っているが、やはり、サツマイモが野生生物に狙われる。四方田氏の場合は、サツマイモの栽培をもっぱら町内の繁華街に近い地域に農場を借り受けて行っており、野生動物による被害はさほど受けていないとのことであるが、自宅周辺の農地では、すでに椎茸栽培を辞め、ヘメロカリスなどの花卉栽培をするなど転換を図っている。

金沢地域には、その他“かたくりの花”の群生地を守る活動をしている新井義虎氏によって、豊かなアジサイ園がその近くに築かれている。ここも、野生動物、特にシカによる食害で、昨年は残念ながらアジサイの花（正確にはガク）がすべて食害にあったとのことである。今回の害獣駆除では、この金沢地区の山林が舞台となったのである。そこで捕獲された若い牡鹿は、こうした農作物への被害をもたらした一頭であったと想像できる。

２　狩猟採集の世界へ

１）狩猟の世界

今回の鳥獣害対策（狩猟）への参加は、令和 5 年 12 月 10 日(日)のことである。きっかけはさらに遡り、同年 5 月に旧皆野町長の石木戸道也氏と懇談した際、同行した学生の一人が石木戸氏の居間にあった鹿の“角”に興味を示したことからである。一昨年の春にも、同様にして昨年度卒業した 4 年生とともに石木戸氏宅を訪ねたが、しかし、その際は鹿の角にこそ興味を持つけれどもその先に話が及ぶことはなかった。この辺りがフィールドワークの妙である。その時々によってどんな懇談になるかわからない。その時々の参加者の顔ぶれによっては、さらに深いところにまで話が及ぶのである。今年度は、参加した一名の学生がさらにその鹿を射止めたところにまで興味を示した。いかにしてその鹿を仕留めたのか、鹿をどのような時に射止めるのか、それは趣味としての狩猟なのか、はたまた別の目的なのか。このように話すうちに石木戸氏が猟銃を見せましょうかという話になる。さらにその学生は、是非見たいという。こうした話題の展開によって、当日参加した学生たちと筆者は、石木戸氏所有の猟銃を実際に見ることになったわけである。ずっしりと重い猟銃の感覚と冷え冷えとした銃身、金属製の切り立った銃眼、引き金、猟銃を収める場所など、それぞれが実に機能的に出来ている。

鉄砲伝来は近世の種子島であった。それから時代はくだり、400 年の時を経て今、目の前にその猟銃がある。それが時には、命をながらえるために使われたり、生物の命を奪ったりする。冷静に考えてみれば、この発明によって人類が文明を発展させたのであり、その反対に生命を脅かすわけ

4　狩野「これからの時代における高等教育に関する研究―自立する学生を育む教育課程の創造にむけて―」、『児童教育実践研究』第 11 巻、第 1 号、5-10 頁、2018 年。

である。ものごとには、このようにつねにコインの表と裏の関係があるわけで、そうした事実を知ることは、これからの時代や生きかたを考える上にも重要なことであるように思う。

石木戸氏宅での懇談は、ここまでであった。冬季になれば狩猟が解禁される。おおよそ 11 月中旬から 2 月の中旬までが猟期とのことであり、その頃に改めて狩猟の様子を学ぶこととなった。

２）鹿を射止める

とはいうものの、実際に狩猟の取り組みを間近で参観することになろうとは、この時はまったく考えていなかった。おそらく、もう忘れてしまったであろう頃、学生から令和 5 年 12 月 10 日（日）に皆野町において狩猟の体験が出来るとの話がもたらされたのである。参加者は、結局のところ“ふるさと支援隊”のメンバーからは一名のみであったものの、筆者が開講している「総合ゼミナール（共通教育科目：後期木曜 2 限）」においてこの話をしてみたところ、受講生の一人が参加したいという。さらには、当日になってみると、“ふるさと支援隊”の学生の父親が参加することになり、筆者を入れて都合 4 名が実際の狩猟を経験することになった。

当日は、朝 7 時半に“総合ゼミナール”を受講する学生が秩父鉄道の皆野駅に到着、筆者の自家用車で集合場所である“満願の湯”駐車場へと移動した。この日は大変寒く、この時間帯でもまだ零度を下回るような陽気であった。しばらくすると、“ふるさと支援”隊員の学生とその父親が合流し、石木戸道也氏が運転する軽トラックが到着した。石木戸氏からは、猟友会専用のベストと無線機を手渡された。ベストは、オレンジや黄色の目立つ色が施されたナイロン製のもので、後で聞いたところによると、同様のキャップとともに猟友会のメンバーのみが着用できるものであるとのことである。これを着ていれば、林のなかで誤って撃たれる心配もないのだろう。

近年は、こうしたオリジナルのものをオークションサイトや古物商などで転売するようなことが起こっており、頭を痛めているとのことである。ちなみにオークションサイトへの転売といえば、各学校に配付された芸能人のグッズがすぐさまオークションや転売市場に出回ったとのことで、筆者が関わる埼玉県新座市内の学校では、最近もたらされた野球用のグローブの保管に神経を使っているということである[5]。これは米国大リーガーの大谷翔平選手が日本の子どもたちへと寄附をしたものということで、この学校には、子ども用のグラブひとつと、大人用のもの 2 つ、1 つは右利き用、1 つは左利き用が届いている。筆者もそのグローブを手に取ってみた。さすがに大谷翔平だけあって、相当に立派なグローブであった。とはいうものの、これをどのように活かしていくかは別問題で、寄附された方としては、たった 3 つのグローブをどうするのか、全校児童が 800 名を超えるのであり、今のところ観賞用、記念撮影用として校長室前に展示、というよりは、机上に置いてある状態であった。それはともかく、猟友会の専用ベストやキャップまでもが転売されたり、オークションに出品される時代とのことで、こうした実情も、地域を学ぶ上では大事なことである。

手渡された無線機は、無線機と片耳用のイヤホンからなり、いざ狩猟が始まった後は、すべてのやりとりがこの無線機を通して行われた。つまり、狩猟の最中は、物音を立てることがタブーであり、ちょっとした音でも、野生動物によって察知されてしまうのだろう。

ちなみに、嗅覚や聴覚は野生動物にとっては自らの生を維持するために欠かすことのできない精密な感覚器官である。五官を駆使して、野生動物は種を持続しているわけである。その一方で、人類は、文明の発達に伴って、次第にその力を失ってきてしまっている。五官の感覚の退化や弱体化は、その種の生の持続にとっては致命的な問題である。人類もいざとなればひとり一人の持つ五官の鋭敏さや精密さの差異によって、種の持続に決定的な課題を突きつけられるのではないか。こうしたことも、野生動物との関わりを通して学ぶことである。

無線などの機器が開発・普及したことによって、狩猟という取り組みもまた格段に進歩したに違いない。無線がない時代はおそらく犬の鳴き声やそ

5　埼玉県新座市立東野小学校における学校評議委員会において、このことが話題となった。令和 6 年 1 月 17 日（水）。

の犬を追い立てる勢子（狩猟の際に、猟犬を使って、獲物である野生動物を追い込めていく役目）の声を手がかりにするほかなかったであろう。詳しくは聞きそびれてしまった。文明の利器が開発・普及する前と今とで、何がどう変わったのかということもまた、貴重な情報であり、学習である。

ちなみに、猟犬が2頭参加していた。この猟犬たちには発信器がつけられていた。そして、その発信を受信する機器を勢子たちが身につけていた。おそらく猟犬たちが移動する位置情報をこうした機器により得ているのだろう。こうしたことも機器がない時代にはどのようにしていたのか。おそらく猟犬の鳴き声や足跡、気配などが唯一の手がかりであったと思われる。

こうした機器のおかげで狩猟技術が格段に進歩したと思われる。むろん、その背後で失われた人類の能力も存在する。実際、今回は、午前9時からと午前10時からの2回にわたる狩猟であった[6]。2回目の猟の際には、猟犬が県道を渡ってしまったということで、そこは猟をすることの出来ない地域であり、獲物の追跡を断念した。こうしたこともかつてなら猟犬の声や足跡を手がかりに追い続けるほかはなかったはずであり、科学技術の恩恵を受けていることのひとつである。

狩猟に際しては、事前の打ち合わせがある。猟友会のメンバーがどの位置で猟をするのか、猟犬を放ち、追いかける勢子と獲物を待ち構える猟師たちがどこに位置するのかを話し合う。話し合いといっても、地理が不案内な私たちには、そこで話し合われている内容をほとんど理解することができなかった。時折登場する浦山とか、金沢とか、神社仏閣の名称とかが辛うじて聞き取れるものの、それ以上のことはまったく分からなかった。こうした一種の地域の俗語や隠語を用いた話し合い（寄り合い）の様子をつぶさに観察したり、聞きとったりする中で、人びとの形成的な事実に迫ることが可能であるし、今後取り組んでみたいことがらである。

狩猟体験に当たっては、猟の最中には物音を立てないこと、特に、足もとの枯れ葉でさえもすべて払いのけて、枯れ葉を踏む音がしないように留意しなければならなかった。石木戸道也氏が同行する筆者たちに対して時折小さな声で指示を出す。

午前9時から行われた一度目の猟に当たっては、筆者と総合ゼミナールの受講学生とが石木戸道也氏の指導の下、金沢地区の浦山にあるアジサイ園の頂上付近で待機することになった。この場所は、何度か訪ねたところであり、ふるさと支援隊の活動において、新井義虎氏の指導の下、土壌の酸性度を調べたり、アジサイの剪定を手伝ったりと、ふるさと支援隊の活動でお世話になった場所である[7]。

今年度は、先述の通り、アジサイ園のアジサイが鹿の食害に遭い、ほぼ全滅の状況であったと聞き及んでいた。実際にアジサイ園を歩いてみると、ほぼすべてのアジサイがガクの部分を失っていた。アジサイは、人間の背の高さくらいまで伸びてはいるものの、ガクは、鹿が食べるのにちょうど良い高さである。味はともかくとして、4月～5月にかけて、これからという時のアジサイは鹿たちにとってはちょうど良いご馳走になるのだろう。その場所で、初回の鹿狩りとなった。

３）野生動物との駆け引き

野生動物と向き合うことは、内なる自然と向き合うことに通じる。人間もまた動物の一種であり、生物の一種である。人間の心身もまた自然である。しかしながら人間の大脳は人工物を作り出す。都市型の生活は、すなわち脳化社会であるというの

6　このことは予め決められていたということではなく、一度目の猟が終わった後で、一服する時間があり、そこで話し合いがもたれ、午前中にもう一度取り組んでみるかという話になった。こうした展開も、何もかも予め立てた計画に従って、何が何でも実行するというような近代文明社会の習慣とは異なることである。あくまでも大自然を相手とする狩猟では、無理は禁物である。参加メンバーの体調や天候、その日の観光客の出足やハイキング客の動向など、さまざまな実情に応じて、臨機応変に柔軟に予定が決められていく。こうした展開もまた、近代文明が切り捨て、忘れ去ってしまってきたことであるように思う。

7　狩野、「総合的な学習の時間」のカリキュラム開発に関する萌芽的研究―中山間地域の生活と文化を中心に―」『児童教育実践研究』第14巻第1号、93-98頁、2021年。

が養老孟司氏の見解である。野生動物とのかかわり合いは、自然との向き合い方であり、人間の内なる自然である“からだ”との向き合い方と同義である。

養老孟司氏によれば、心身と書いて“しんしん”と発音するが、これはかつては“身心”と書いたという。今のように、“心”が先で、“身体”が後という表記は、近代文明社会の生みだしたものらしい。たとえば、福沢諭吉の『文明論之概略』には、“身心”という言葉が登場する。福沢は、あえて“身心”と、“身体”を先に示した後に、“心”を示す言葉を用いている。つまり身体があり、その身体の中に心があるわけである。身体を抜きにして、心は存在しないわけである。

皆野町の林の中で息をこらえるようにしてじっと待つ。その間中、何を考えるということはない。ひたすら耳を澄ます。感覚器官が次第に鋭敏になり、周囲の変化に対して、敏感に感じ取れるようになるのがわかる。この間、自然と身体とが一体化したような気分になる。

遠くから聞こえてくる猟犬の鳴き声が近づく。猟師たちは身構える。無言のうちに周囲に気を向ける。次第に鳴き声が遠ざかれば、再び待機の姿勢へと戻る。この繰り返しである。狩猟採集とは、実にこうした自然との対話によって成り立つものである。理窟ではなく、ひたすら自然に身をまかせる。身を委ねる。太陽の日差しが降り注げば、辺りは急に明るくなる。林の木々からは、断続的に落ち葉が舞い落ちる。その舞い落ちる落ち葉の回転を眺めていると、人間もまた、自然の一部であると思えるようになってくる。狩猟採集とは、実に自然との一体感を感じつつ、一体となる取り組みである[8]。

しばらくすると銃声がひとつだけ響き渡る。獲物を捕らえたのだろうか。再び静寂が戻る。無線を通して、獲物を捕らえたことがもたらされる。その場所へと全員が駆けつけるわけである。

獲物を捕らえた場所は、深い谷になった場所である。石木戸氏によれば、その場所ですぐさま血を抜き、内臓を取り出すのだそうである。一種の儀式であり、それと同時に生物学的にもおそらく必要な処置である。はげしく吠え立てる猟犬たちとともに獲物が姿をあらわした。両足や首に結わえ付けたロープをひっぱりながら、獲物が姿をあらわす。深い谷から持ち上げるのには、軽トラックが活躍する。こうした動力もまた、文明の利器である。なかった時代にはどうしていたのだろうか。おそらく大変な苦労を伴ったことであろう。

無事、軽トラックの荷台に獲物が収められ、次の狩猟が始まる。以下、今朝方に起こったことと同様の手続きを経て、2回目の猟が始まった。

３　探究と形成の架橋と横断

１）狩猟採集と人類

狩猟の後、お昼を挟んで捕らえた牡鹿の解体作業を見学した。見学といっても、学生たちは刃物を持ち、果敢に鹿の解体に携わっている。後日、参加した二人の学生にそれぞれ尋ねてみたところ、まったく嫌悪感や恐怖感はなかったそうである。むしろ、生きものの生をいただくという厳粛な儀式に携わるような気分だったとのことである。

皮を剥ぐ手順は、腹から尻へ、両足の先から胴へという方向で進む。次第に皮が引き剥がされると、足が順に切り離され、最後に胴体に進む。この間1時間を少し超えるくらいの時間である。地元の猟師たちに教わりながら、解体作業がすすむ。解体した獲物が切り分けられる。切り分けられた鹿のからだは、作業小屋に運ばれる。そこでさらに細かな作業が行われている。

時折、吠え続ける猟犬たちに収獲した鹿の肉が振る舞われる。そうすると少しの時間だけ、犬の咆哮がやむ。人類同様に、犬もまた食事中はおとなしくなる。肉や骨を食む音だけが解体する現場

8　1994年の春、沖縄の本部町の海岸で、浜降りの行事を体験した。浜降りは、女性たちの清めの儀礼が通俗化し、現在では、春の行楽行事ともなっており、家族総出で海のそばに繰り出し、そこで貝を拾ったり、タコを捕ったりし、それらの獲物を調理して食べる年中行事になっている。筆者は、仲間たちとともにその行事に参加し、大量の魚介類を採集した。このときの活動の際にも感じた自然との一体感、自然との関わり合いの豊かさというものが、自然の中にある生きものとの命のやりとりの中で実感することがある。今回は、野生動物の中でも哺乳動物との関わり合いであり、魚介類の採集とはまたひとつ異なる局面を経験することになった。

に響き渡る。それも一瞬のことであり、再び犬たちは吠え続けるのである。

果たしてこの犬たちは、何に対して吠えているのだろうか。空腹などの生理的な現象なのか、本能的なものなのか。それとも訓練の結果として、その鋭い嗅覚が獲物である鹿の解体作業によって生じている鹿の臭いに強く反応しているのだろうか。

鹿を解体した現場が、すべてきれいに洗い流され、清掃され、終了する。残った骨や皮は、町が運営する処分場に運ばれていった。こうした作業も、特段の話し合いなく阿吽の呼吸で淡々と進む。

作業がすべて終わり、今朝方の会合で集まった小屋に集まり、解散の会が行われた。この小屋は、石木戸氏によれば、猟友会仲間の有志の拠出により建設されたものとのことであった[9]。猟友会の会長である町議会議長の大澤金作氏宅の庭先に設置されている。ここがこの町での狩猟の根拠地になるわけである。

２）原初的な経験と学習

人類の歴史の中で人びとが生を育み、次世代を残してきた過程において、種の持続ということが最も重大なことがらであったと思われる。種の持続がなされなければ、この地球から消え去ってしまう。おそらく本能的に種をいかに持続するかという知恵が蓄積され、それが伝承されてきた[10]。衣食住は、そうした知恵の総体である。

たとえば、普通教育においては、科学を背景とする知の伝達が様式化され、実行され、その方法や内容が形成されてきたが、しかし、そこから抜け落ちてしまったものがある。それが形成的な領域である。

かつて“生活綴方”運動が展開する中で、人間の“形成”的な過程に注目する実践や研究が展開した。このことは、普通教育の背景である科学がすべてを解明できるし、すべてを言語化できるとした人間の傲慢さや思い上がりを見ぬいた結果であるともいえる。

結局のところ、科学は万能ではない。人類が解明し得た世界は、ほんの僅かである。分からないことだらけであるといってよい。そうした限界を知りつつ、言語化の難しい世界、つまり形成の世界を学校教育に取り入れようと試みた。それがかつての生活綴方の運動である。

今日、探究の名のものとに取り組まれるのは、主として科学を背景とした言語世界である。これはこれとしてひとつの動きである。大事なことがらではある。しかしながら、その一方で抜け落ちてしまったのが“形成”の世界である。

一般的には、“子どもの遊び”とか、“生活”とかいわれ、幼児教育の世界では追究が進むものの、普通教育としては抜けおちてしまう。鷲田清一氏は、幼稚園で楽しかったお遊戯が小学校の体育になると、途端に面白くなくなるという。鷲田は、そこに居ても良いという安心感や安堵感のようなものが学校教育から抜けおちてしまっているからであると指摘する[11]。幼児教育におけるお遊戯はそこに居て良いという安心感を育む。それは身体性に位置付くものであり、形成的な事実を応用したものである。より原初的な非言語の身体交流の世界が幼児教育にはある。それは、基本的に幼児教育が非言語によって成り立つ世界だからである。

狩猟採集の世界は、人間の身体に基づいている。自然に身をまかせ、自然に耳を傾ける。全身を自然の世界に委ねること、つまり、形成の世界への全面的な信頼に基づいて成り立っている。そこに居て良いという感覚、その場所こそが安堵感のある場所であるという感覚が、狩猟採集の現場にはある。

こうした場にある身体的な感覚を取り戻すことが、総合的な学習の時間や総合的な探究の時間に

9　石木戸氏によれば、集合場所となった満願の湯もまた、地域の有志の出資により掘削され、湧きだしたものとのことであった。一種のユイや講などの習慣と思われる。狩猟用の小屋は、かなり立派な小屋であって、広さもかなりある。10 坪以上の建坪面積はあると思われた。

10　本来は、本能的な仕組みであると思われるが、近年の少子高齢化の実情を踏まえると、必ずしも種の持続が本能的に最優先課題であるとは思えないような事実にぶつかる。こうしたことも、今後の大きな課題であると思われる。

11　鷲田清一『悲鳴を上げる身体』68-71 頁、ＰＨＰ新書、1998 年。

可能となる。その場に身をおいたり、その場に漬ったりする原初的な経験というものの形成的な意味や価値を追究することが、こうしたカリキュラムの中で可能である。特に長い年月をかけて人類が蓄積してきた形成的な世界というものに今一度目を向けたいものである。

音楽でいえば、身体性に依拠した太鼓の音がある。これもまたかつてはゴリラのドラミングのような身体を打ち鳴らす音であったのではないか。言語もまた、意味をなす前の長い時間をかけて、身体が奏でる音に耳を傾けたところから誕生したのではないか。自然が奏でる林のざわめきや風の音、木の葉のかすかな葉擦れの音、落ち葉を踏む音、こうした音の総体として言語が生じたのではないか。こうした原初的な世界に立ち戻る機会をこれからの時代の教育課程論はつくり出していくことが可能である。

現代は、もはやデジタル情報なしでは生きていけないところまで来てしまっている。ヴィム・ヴェンダース監督の映画「PERFECT DAYS[12]」では、60年代の音楽がテープレコーダーによって再生され、その音に耳を傾ける若者が登場する。古物商からは、一万円を超える値段が提示されるカセットテープの世界は、アナログ世界のひとつである。フィルムカメラによって撮影される世界、DPE によって焼き付けられた写真など、やがては失われる世界が今はまだかすかに残っている。同時に自然と呼べる世界は、人為的に改変され、その趣さえも異なったものに変革されてきたが、しかし、それでも自然に生育する野生動物や植物の世界は、人間の身体に働きかける存在である。狩猟採集にとどまることなく、人びとのこの地球での暮らしそのものへの関心がこれからの知のあり方に検討を迫る。こうした意識や探究を続けることが、人間の存在そのものを問い、人間とは何かということを究極の目的とする、知の目的を明らかにしていく過程となりうるのではないか。

12　2023 年に製作された映画である。上映時間は、124 分で、映倫の区分で、誰でも鑑賞できる“G”に区分されている。制作地は、日本となっている。配給は、ビターズ・エンド、劇場公開日：2023 年 12 月 22 日である。